

悪役令息になんかなりません！

僕は兄様と幸せになります！6

人物紹介

Character

ルシル・マロウ

物語の本来の主人公で
浄化の力を持つ光の愛し子。
エドワードと同様の転生者で、
自分の役目を終えた後のことを
悩んでいるようで……

ハロルド・フィンレー

アルフレッドとエドワードの弟で、
双子の片割れ。
妖精にまつわる加護の
持ち主で妖精と
心を通じ合わせることができる。

デイヴィット・グランデス・フィンレー

エドワードの義父で、
アルフレッドの実父。
優しく有能な侯爵。
災厄や国内情勢への
対応に追われている。

カルロス・グランデス・フィンレー

エドワード達の祖父。
土魔法のエキスパートで
何かと規格外な元侯爵。
災厄の封印にもその知識と
実力を発揮している。

ルフェリット王国

エドワード達の暮らす王国。
豊かな国だったが、
しばらく前から疫病や凶作、
魔物の大量出現など
数々の事件が起こり、
その対応で混乱している。

オールドリッジ 元公爵

かつてエドワードを
狙っていた令息の父で、
数々の罪によって爵位を失った。
そのことでフィンレーを
深く恨んでいて……

エドワード・フィンレー

悪役令息として転生したが
本来の運命は回避し、
家族や友人達に愛されている
穏やかで賢い侯爵令息。
これまで陰で父や兄を助けていたが、
自らの加護を大切な人々のために
役立てることを決めて……

アルフレッド・グランデス・フィンレー

フィンレー侯爵家の長男で
エドワードの優秀な義兄。
エドワードに想いを伝え、
その答えを待っている。
力を狙われることを心配し、
エドワードが表に出ることを
反対していたが……



兄様の言葉は僕の胸の中にストーンと落ちてきた。

「私はその色を贈りたいのはエディだ。他の誰でもないって言ったなら、信じてもらえるかな」
僕は何を言われたのか分からなかった。

だって、十六歳の誕生日は僕にとつてうまくいかない事だらけだったから。

行方が分からなくなっていた魔人が再び学園に現れた事。

それを捕獲しようとして自分を過信し、友人達まで危ない目に遭わせてしまった事。

母様や兄様、それから皆を心配させた事。

そして兄様がくださった誕生日プレゼントが、以前僕が贈ったものとお揃いみたいな乗馬用のグローブで、手首の留め具飾りには兄様の色と僕の色の飾り石が嵌められていた事………

嬉しかったんだ。だけどそれと同じくらい切なくなった。だって、もうずっと考えていたから。

いつまでこうして兄様の色を付けていても許されるのかって。自分の瞳の色を贈る行為の意味を知ってから、いつまでも甘えていてはいけないうって分かっていた。

それでもその色を欲しいと思う自分がある事も、僕はちゃんと気付いていた。

どうして今年の誕生日は、穏やかで優しいだけではいられないのだろうと嘆きつつ、最後にするから、きちんと弁えるから、だから取り上げないでほしいと思つた時に告げられたその言葉に呆然とした僕を見て、兄様は言葉が続けた。

「エディだからその石を贈つたんだ。その石はエディのものだ。最後じゃなくてこれからも贈りたい。その色を身につけていてほしい。ねえ、エディ。ずっと、好きだよ」

涙で濡れてしまった頬に触れた唇。驚く僕に兄様は「やっと言えた」って笑つた。

「答えは急がないから。考えてほしい」と「安心して、考えて、選んでほしい」という言葉と一緒に、欲しかったプレゼントは僕の手の中にあつた。

僕はもうその答えを知つていた。選びたいものは一つだけだ。

それでも僕には、それを告げる勇気がなかつたんだ……

僕はエドワード・フィンレー。四歳の時に生家であるハーヴィン伯爵家から助け出され、フィンレー家の養子になつた、不思議な『記憶』を持つ『元悪役令息』だ。

『元』というのはもうそうならないって僕が信じているから。その『記憶』が甦つた時、僕はこの世界が『記憶』の中にある小説と同じ世界で、そこに書かれていた『悪役令息』が自分だつて気付いた。でもそんなものにならなくなかつた僕は、味方になつてくれた兄様と一緒に運命に抗つてきたんだ。そうしてここはやっぱり小説とは違つて喜んでいただけけれど、今、僕達の世界は大きな危機を迎えていた。

『記憶』の小説の中に書かれていた『世界バランスの崩壊』と同じような事が起きるだけでなく、お伽話の英雄譚だと思つていた『厄災』という名の化け物の『首』が実在して、その封印が解けかけているせいで、様々な禍が起きていると分かつたんだ。

それを止めるべく父様達は『首』の封印場所を探した。僕も友達と一緒に色々な事を調べたよ。そうしてその一つが、僕が生まれた元ハーヴィン領の領主の屋敷の地下に封じられていると判明した。

元ハーヴィンに封印されている一の首（呪い）を再び封印するために、妖精がくれた枝を使ってそれを眠らせなければいけない事も分かつた。

お祖父様も、父様も、兄様も、そしてそれぞれの友人や仲間達、【光の愛し子】であるルシルも封印のために元ハーヴィンに行つた。僕は一緒に行く事は出来なかつた。でも一の首（呪い）の封印がうまくいくように、妖精の枝から育てた樹と一緒に精一杯祈つた。

封印は成功したけれど、兄様がお守り代わりに持つていった妖精の樹の枝が、なぜか大木となつて一の首（呪い）を包むゆりかごのようになったと聞かされた。どうしてかな？

ともあれ、ルフエリット国内に三つあるという『首』の一つが封印され、僕達につかの間の休息が訪れた。

「エディ、冷えると思つたら雪が降ってきたよ」

そう言つてタウンハウスの中に入ってきたのは兄様だつた。

「お帰りなさい、アル兄様。雪ですか？ ひどくなりそうでしょうか」

「フィンレーと比べたら粉雪だね」

兄様の言葉に僕は思わず笑ってしまった。

「ふふふ、でも王都は少しでも降ると大変ですからね。馬車は大丈夫でしたか？」

「ああ、降り出したばかりだったから。積もるようなものではないと思うけど、凍ると明日が面倒だな」

「そうですね。兄様、温かいお茶でもいかがですか？」

「いいね。では着替えてこよう」

「はい。お待ちしています」

兄様は頷いて二階の自室に向かい、僕はリビングルームのソファにもう一度腰かけた。

「エドワード様、温かいお茶を淹れ直します。出来立ての焼き菓子もあるそうですので一緒にお出しいたします。暖炉の火ももう少し強くしますね」

「うん。ありがとう、マリー」

下げられたお茶。ぱちりと爆ぜた薪の音。そして二階から下りてくる足音と、聞こえてきた声。

「ああ、暖かいな。魔道具もいけれど、やはり暖炉の暖かさもいいね」

「そうですね。シェフが焼き立てのお菓子を出してくれるようです」

「それは早めに帰ってきた甲斐があるね」

ローテーブルを挟んで向かい合わせに座る兄様は、以前と比べて随分早く帰ってこられるように

なった。父様もフィンレーで仕事が出来ている。

「うん？ 新しいお茶かな？」

「さすがですね。新しい年に向けて売られ出したものだそうです」

「そうか。一足早く飲んでしまったね。じゃあ少し早いけど、来年もよろしくね、エディ」

「はい。よろしくお願います」

そう言って笑いつつ、僕はあの日もらった言葉を思い出していた。胸の中でお守りみたいに大事にしている言葉。

『ずっと、好きだよ』

そして封印の日、妖精のくれた枝の樹にしがみつくようにして祈りながら口にした、自分の気持ちも思い出す。

『……………も……………好き……………』

もう少して一年が終わる。

だけど……………僕は僕の中にある答えを、まだ兄様に伝えられずにいる。



『首』が封印された後、学園は補講の時期に入っていて、結局皆と顔を合わせて話が出来たのは高等部一年の最終日だった。この一年色々な事があったなと思う。

学園に現れた魔人は捕らえられたけれど、結局その欠片のようなものがどこかに隠れているのか、もう全て消えてしまっているのかもはっきりしていない。

もつとも魔人はオールドリッジ公爵息子だけがなりえたわけではなく、ルシルが元ハーヴィン領で浄化したように、魔素が増えれば他にも出現してしまう可能性はあるんだ。

「本当に良かったね。ルシルも皆も無事で、『首』をちゃんと封印し直せて。魔物の出現も減っているみたいだし、魔素も目に見えて少なくなったって父上が言っていたよ」

ミツチエル君の言葉に僕は大きく頷いた。

「書簡でもお礼をしたけど、ステイブの情報に本当に助かったよ。やっぱり名前が分かったのは封印のために大きな力になったと思う。名は縛りを持つからね」

「間に合って良かったです。何しろ昔の話ですし、王国内に残っているのは生粋まきずいのドワーフではなく、ドワーフの血を引く者達ですからね。祖父とモーリス領の領主が協力してくれなければ難しかったかもしれません」

「ドワーフか……確かにあの辺は昔から鍛冶屋や道具屋が多かった。それにしてもモーリス領の領主もよく協力してくれたね」

レナード君がそう言うとうー君が口を開いた。

「そりゃあ、するだろう。『首』の事を知らなくても王国内に魔物が増えているのは事実だし、領地の島にある王国最大のダンジョンはここ最近何度もスタンピードの恐れがあると言われていたからね。そのためモーリスに来る冒険者の数も減っていると聞いたよ。モーリスにとってダンジョン

はある意味、冒険者達の観光地のようなものだ」

「ダンジョンが観光地か。でもモーリスにとっては昔からそこにあつたものだし、人が集まれば金銭のやりとりが発生する。魔物の素材の売買も大きな取引だからそういう事になるんだろうね」

二人のやりとりを聞きながら、僕はそういうものなんだと納得した。

ちなみにモーリス領は王国の最南端に位置していて、周辺のいくつかの島も領地だ。その中の一番大きな島に王国内で最大と言われているダンジョンがあつて、スタンピードの兆候があるという話も何度か聞いた覚えがあつた。しばらくダンジョンの話題が続く中、僕はスタンピードと呼ばれるものが『首』に関係ない事を祈りたいなと思つた。

だつて残りの『首』も二つある筈だ。それに魔素の中に消えたという護衛も行方が分かつていないし、アンデッドの噂もあつたしね。

「エディ、顔色が悪いよ。大丈夫？」

レナード君に声をかけられて僕はハツとして顔を上げた。

「ああ、ごめんね。せっかく封印出来たのに、『世界バランスの崩壊』っていうのを考えるとまだ終わっていない部分も色々あるなつて考えちゃつた。でもそんな心配をしても仕方がないよね。表面に出てきた事や予測出来るものから考えていかないとね」

「そうそう。無理は駄目だよ。エディもルシルも」

「うわあ、いきなり矛先を向けられたよ！」

ミツチエル君の言葉にルシルが声を上げて、皆が笑つた。

「そうだよね。ルシルも結構無茶するタイプだからね」

僕がそう言うのとルシルは困ったような顔をした。

「仕方がないよ。だって、そういうものだと思っていたからさ。でも僕も王国内の混乱が収まったら自分の事を考えるつもりだよ」

「ルシル？」

ルシルの答えに僕は思わず声を出してしまった。だって、ルシルはシルヴァン殿下の事が好きで、彼の傍にいたかったんじゃないのかな。それとも小説のようにはならないって思っているのかな。

王太子様ではなくシルヴァン様を次期国王につけて考えている人も一定数いると、以前父様が言っていた。色々難しいね。

「エディ、そんな深刻な顔をしないで。ちゃんと考えるからさ。さて、じゃあ、そろそろ今年はお別れだね。来年、高等部二年になってお会いしましょう。皆様、良いお年を」

ルシルが口にした、どこかで聞いた覚えのあるその言葉はいつからか僕達の年末の挨拶になった。

「ああ、良いお年を」

「また来年。良いお年を」

「風邪をひいたりしないようにね。また何かあったら皆で色々考えよう。何しろ『首』はあと二つあるからね」

「わあ〜、ミツチエル、厳しい事を言うなあ。ともあれ、今は一の首の封印を喜んで、年の終わりの祈りを捧げよう。良いお年を」

皆がそれぞれに言って、高等部一年が終わった。



新しい年が始まり、王城は新年の挨拶をする貴族達でごった返していた。例年の光景だ。

「こうして大きな懸念事項を解決して、新しい年を迎えられたのは本当にめでたい事です。今年もよろしく願います」

にこやかにそう言ったニールデン公爵に、デイヴィットは「こちらこそよろしく願いましたます」と礼を返した。

六家あった公爵家もオールドリッジ家のように爵位を剥奪されたり、ベウィック家のように全ての爵位を返上したり、肅清により降爵されたりして、ニールデン家と王妃の実家であるコートニーズ家の二家となり、その他の家も大きな変動のあった一年だった。

全ての『首』の封印が終われば、また色々動きそうだとニールデンは言う。もつともデイヴィットは降爵などまっぴらごめんだと思っていた。侯爵家の上は公爵家しかない。何よりフィンレーはあの地を離れるわけにはいかないのだ。

そこへ挨拶を終えたケネスがやってきた。

「こちらにいらつしやると伺って。ご一緒にでもよろしいでしょうか？」

言いながらすでに腰を下ろす気満々のレイモンド伯爵に、挨拶用にこの部屋を借りたニールデン

「がにこやかに」どうぞ」と答えた。

「伯爵家の挨拶が終わってようやく子爵家だ。賢者の称号と今回の封印によって、今年最初に陞爵されるのはハワードだろうな。大体あの男が子爵っていう方がおかしいんだよ」

ケネスの言葉にデイヴィットが「確かに」と笑った。

「現時点では『首』の事が公になつていないので、賢者の称号だけですぐに陞爵するのは難しいかもしれませんが、ハーヴィン領の調査に関しての功績は大きい。然るべき時期に大きな陞爵があるかもしれませんね。ところでスタンリー卿は？」

ニールデンが尋ねると再びケネスが口を開いた。

「挨拶のあとは一日近衛騎士団の団長として動くようです。本人はそろそろ譲りたいようですが、なかなかうまくいきません。あれはもうごり押しで退任するしかないですよ」

「以前ごり押しどころか、謀反かというような騒ぎを起こして王国魔導騎士隊の隊長を辞した男の言葉に、二人は苦笑を浮かべた。

「ああ、そういえば私もお参りをしてきましたよ。厄災封じの神殿に。公式に何があったのかわらされずとも、あれだけのものが建ち、聖神殿の大神官までもが訪れれば、やはりそれなりに噂は広がります。色々と事件の続いた元ハーヴィンに祈りの場所が出来たというのは、良かったのかもしれませんが。いずれそれぞれの『首』の事も発表されるでしょう。後の世まで語り継いで、忘れぬようにしていかなければと思います」

そう。『首』はあと二つ。そして、魔人や一時期噂の立った魔素に落ちた者、アンデッドなどに ついては結局うやむやになってしまっている。全てが明らかになるといのは難しいかもしれないが、それでも心配の種は出来る限り排除しておきたい。

「皆様、お揃いですね。おめでとございます。今年もどうぞよろしく願っています」

「おめでとございます。メイソン卿」

「昨年は大変お世話になりました。今年はまだ少し穏やかな年になりますようお願いしております」

「はい。私です」

にこやかなやりとりをして、椅子に腰を下ろしたハワードは出されたお茶に口をつけると徐に話し始めた。

「ところで、『首』の噂を聞きつけた者がいるようですね」

その言葉に口を開いたのはデイヴィットだった。

「まあ、色々な手を使ったので、どこからかは漏れてくる可能性もあるだろうね。エドワードについても情報は当主のみと縛りをつけさせたが、それを調べる手の者もいただろう」

「そのあたりは想定内だが、『首』について余計な手を伸ばされるのは困る」

ケネスが後を継ぐようにそう言うと、ニールデンが頷きながら口を開いた。

「ああ、それは困りますね。私の手が届く範囲であれば、少し話して聞かせる事も出来ますが」

「それはありがたい。ニールデン公にそうしていただけるのであれば、フィンレーとしても荒業を 使わずに済みます」

「分かりました。余計なところまで詮索がいくと後々が面倒ですからね。気になるのはマーロウ

です。どうやら直接手を回している者がいるように思います。【光の愛し子】の守りも少し固めた方がよろしいかもしれませんね。私ですと囲い込みになりそうですので」

「では私がマールロウと話をいたします。その後お力添えをいただければ助かります」
ハワードがそう言って頭を下げて、部屋の中に僅かな沈黙が流れた。

「はああ……結局今年もこんな感じか……」

「全く進歩のない者が多くてうんざりしますね。理解出来ないものにどうして手を出そうとするのか。それが自分の手に負えるか負えないかも分からないというのに」

「全くです。魔素や魔物の騒ぎ、魔人の騒ぎも然り。アンデッドの噂の時も自分の手柄になるかもしれないと思う事に関しては本当に動きが早い。こっちは手柄にしたくてやっているわけではないのだが」

「いっそ体内魔素の騒ぎで引つかかってくれたら良かったのですが、そういう奴らに限って正義感でやっているため引つかからないんですよ。とにかく、この新年の諸々が終わり次第、残りの『首』の場所を特定したいと思います」

疲れ切ったケネスの言葉にデイヴィットが続き、ついでニールデン、最後にため息交じりにハワードが締めくくった。

「ああ、拳がっている場所をどんどん調べていこう。今の状況を考えれば他の『首』の封印はそれなりに効いている状態なのではないかと思っただけだ。ただ、同時期に封印されている事を考慮すれば、それがいつ今回のように解けかけてもおかしくはない。あの封印騒ぎは出来れば二度と

したくないからね」

デイヴィットの言葉にケネスとハワードは大きく頷いた。そして。

「引き続き、皆様、お力添えをお願いします」

ニールデンが申し訳なきようにそう言うと、三人は力なく笑ってため息を落とした。



一の月の一週を過ぎて学園が始まった。

「おはよう、エディ」

制服に着替えて部屋を出た途端声をかけられて、僕は慌てて後ろを振り返った。

「おはようございます。アル兄様」

「今日から二年生だね」

「はい！」

そう言われて僕は勢い良く返事をした。

「ふふふ、帰ってきたら進級祝いをしようか。今日は早く帰ってこられると思うんだ」

「わあ！ ありがとうございます！」

「エディの好きなものをシェフに作ってもらおう。何が食べたい？」

「に、兄様の好きなものを！」

僕の答えに兄様は一瞬驚いたような顔をして、笑い出した。

「エディは変わらないね。じゃあ私が頼んでおくから楽しみにしていて。気を付けて行っておいで」
「ありがとうございます」

僕はこうして久しぶりに兄様に見送られて馬車に乗った。

「おはよう」

昨年とは異なる教室に入っていると、すでに見知った顔があった。

「おはよう、エディ」

高等部も基本的にクラスの変更はない。ただ三年になるとそれぞれの科の中で学ぶ内容が細分化されて、さらに自分の魔力や剣術などのレベルによつて講義が異なるらしい。

「ねえねえ、エディ。ちよつと、びつくりだよ！」

「駄目だよ、ミツチエル。ちゃんと本人達から言わせてあげないと」

ミツチエル君がニコニコ笑つてそう言い出し、ルシルに窘められたのを見て「本人達？」と尋ねると、ユージーン君とトーマス君が僕の前にやつてきた。

「おはよう。エディ。あの、ちよつと話を。あとでしようと思つただけだよ。えつと」

トーマス君は歯切れが悪い感じで顔を赤くしている。どうしたのかな。そう思っていると隣にいたユージーン君が口を開いた。

「実は、カーライルに婚約の打診をしていたんだけど、それが年の始めに認められたんだ。一応

仮婚約つていう事で、お互いに十八になったら正式に婚約して、卒業後に結婚する事になった」

「へ？」

「ちよつとエディ、その反応はないでしょう、もう。おめでどうでしょう」

「あ、うん、え、あ、こ、婚約？」

僕の問いにトーマス君が赤い顔でコクリと頷いた。

「うん。そうなつたんだ。卒業したらローマースクに行くよ」

そう答えて幸せそうな表情を浮かべたトーマス君に、僕は慌てて「おめでどう」と言った。

「ありがとう、エディ」

「リックの婚約の次はトムとジンかあ。なんだかそんなつもりもないのにちよつとドキドキして焦るな」

「分かるー！」

ミツチエル君とルシルが盛り上がり、トーマス君が赤くなつてしまつた顔を俯かせているのを見つめながら、僕は「こんな風に卒業後の事もだんだん決まっていくのかな」とぼんやり考えてしまい、ステイブ君から「何かありましたか？」つて尋ねられてしまった。

「え？ ううん、何も。おめでどうつていう気持ちと、驚いた気持ちと、卒業まであと二年かつていう気持ちを改めて感じていた。ミツチエルが言った通り、自分は何も決まっていなから焦る気持ちもあつたけど、あと二年は考える時間があるつて思うようにするよ。ふふふ。二人とも本当におめでどう」

改めてそう言うと、トーマス君は嬉しそうにもう一度「ありがとう」って答えた。

ふと思いつく、カーライル領で魔物が出て「何も出来なかった」と泣いていた顔。だけどその中でもトーマス君は僕と同じように、自分の出来る事を探していた。

お祖父様じいの講義と一緒に受けていたトーマス君の婚約は僕にとっても特別で、そんなトーマス君の隣に彼の姿をずっと見てきたユーージンと一緒にいてくれるのはすごく嬉しいと思った。

「あ、講義が始まるね」

講師が入ってきて僕達は前を向いた。並んで座った二人がお互いの顔を見てふっと笑っていて、なんだかとても羨ましかった。

その日の夕食は僕の好きなものばかりが並んだ。兄様は約束通り早く帰ってきて、進級祝いをしてくれたんだ。

「改めて、進級おめでとう。エディ」

「ありがとうございます。お料理も嬉しいけど、兄様と一緒に祝い出来る事が嬉しいです」

僕がそう言うのと兄様はにっこり笑って、「喜んでもらえて良かった」と答えた。

「なんだか食事の差し入れをしていたのがすごく昔のようですね」

「ああ、そうだねえ。エディの差し入れには本当に助けられたよ。最初は少し驚かれたけどね」

「え、そうだったんですか!」

驚いて尋ねると兄様は笑いながら頷いた。

「『アル、食事を持ち歩いているのかい?』ってダニーに引かれたんだ。マーティは私がマジックバッグの中からどんどん食べ物を出していくのを無言のまま見つめていて、ジムはすぐに『うまそうだな』って言った。ああ、ルシルもロイスも呆然としていたな。殿下は普通に『差し入れか?』って当たり前のように手を伸ばして毒見役が慌てていた。皆エディからだとか分かるとすぐに食べ始めたよ」初めて聞く話に、僕はその時の皆を想像して思わず笑ってしまった。

去年の兄様はお城に詰めていた事が多かったけれど、今年はこんな風に一緒に食事をしたり、時々勉強の話や、温室の話をしたり出来るんだ。

「驚かせてしまったようですが、皆さんに食べていただけただけなら良かったです」

「ああ、時間の感覚がなくなりそうな日が続いたからね」

「そうですね。身体を壊してしまうのではないかと心配でした」

「エディのお陰で助かった」

そう言って兄様はワインを入れたグラスをゆっくりと傾けた。僕はまだ果実水だけだね。

「……………またそんな日がくるのでしょうか?」

「一之首ほど切羽詰まっていけない気がするけれど、やはり残りの『首』の場所を特定して封印の状況を確認しなければいけないと父上達も思っているよ」

「そうですね。早く見つかる事を願っています。そして出来ればあの時のような忙しさにならぬように願っています」

「ああ、本当にね。ところでエディ、何かあったのかな」

「え？」

「いつもと少し顔つきが違う気がするよ」

「そんな事は……………」

「そう？ それならいいけど。何か困った事や不安な事があつたら教えてね」

「ありがとうございます。クラスも変わりませんし。特に……ああ、でも勉強は少し難しくなるみたいなので頑張ります」

「そう。分からない事があつたら聞いてね」

「はい。ありがとうございます」

笑って、食事をして、それからまたちよつとだけお城の話を聞いて、僕は今日のお礼を言つて部屋へ戻つた。

兄様は優しい。答えは急がないと言つた通り、返事を聞いてくる事はない。ただその眼差しが今までよりも甘くなつていて、僕自身がどうしたらいいのか分からないと思つているだけだ。

僕の中で出ている答えをそのまま告げてしまつていいんだろうか。

安心して、考えて、選んでほいつて言われたけれど、それは次期フィンレー当主である兄様にとつて本当に良い事なのかな。

好きつて答えてしまつたら、こんな風に悩む気持ちはなくなるのかな。

「……………顔に出ちゃつたのかあ」

結局最後まで言えなかつたトーマス君とユージン君の仮婚約の話。

羨ましいのなら、自分の気持ちを素直に伝えたらいいのに。頭の中でそう思う一方で、本当にそうしていいのか納得出来るまではやっぱり言えないと、僕は自分の気持ちを持って余すようにため息をついた。



週末はフィンレーでお祖父様の魔法の講義だ。

父様と兄様からは元ハーヴィンで枝が大木になった話を聞いていた。でもお祖父様は木が外でどんどん伸びていくところも、地下で『首』をゆりかごみたいに包んでいるところも見ていたそうだから、お祖父様からも話をお聞きしたいなつて思つていたんだ。

アシユトンさん達も参加していたけど、ここで知つた事を他では話さないという契約をしているので、僕は早速実験を開始した。

「例えばこの薬草を成長させようとすると……」

僕は温室の隅にある薬草の苗に、離れた場所から大きくなるように念じた。いつもはそれが植えられて土に手を当てたり、薬草に手をかざしたりしていたから、離れていても本当に成長するのか確認したかつたんだ。だつて皆、妖精がくれた枝を大きな樹にしたのは僕だつて言うんだけど、僕は皆を守つてほしいつてお祈りをしただけで、枝を育ててほしいなんて願つた覚えは全くないんだもん。

「どう？ ハリー」

「変わってないです」

「うーん、やっぱり対象が近いとか、植えられているところに触るとかじゃないと、成長の魔法は発動しないんじゃないかなあ」

僕はそう言いながら先ほどの薬草に近づいて、苗が植えられている土に手を突いた。すると小さな薬草はたちまち大きな葉になった。ジョシユアはそれを面白そうに眺め、アシントンさんは目を見開いて、そしてハリーはなぜか自慢げな表情を浮かべた。

「使っている加護の力が違うのかもしれないな」

お祖父様がポツリと呟いた。

「え？」

「今エドワードが使ったのは恐らく【緑の手】だろう。植物を育てる大地の恵みの魔法だ。だが、幼い頃にあの魔熊を倒したのは、魔力暴走のせいもあったが、昨年から色々試している【精霊王の祝福】の力が大きいのだろう。元々は【グランディス神の加護】の中にある二つの力だ。ハーヴィンでの枝の成長は祈りを通してそれらの力が複合された結果ではないかと思う」

そう、【精霊王の祝福】は昨年からお祖父様と色々試しているんだ。今までは隠さなければいけないって思っていたし、出来れば使わない方がいいのかもしれないけれど、それでも僕はあの命を奪い取るような力を確実に自分のものにしたかった。誰かを守るために自分の意思で使えるようになりたいって思うようになった。

お祖父様の屋敷の近くで定期的に魔獣を討伐するって聞いて参加もした。だけど僕は未だにあの魔法を発動出来ない。僕の中に命を奪う事への怖さみたいなものがあるからだってお祖父様は言っていた。魔物も魔獣も命を吸い取るのは確かに怖い。化け物と呼ばれてしまうかもしれないという気持ちもある。

それでも自分の力だもの。祝福という名のついた力が、ただ命を奪うものではなくそこに何かの意味がある筈だっと思っていいんだ。それに、やっぱり僕は、大切な人達を守る力が欲しい。

もっともそんな命のやりとりをするような事が無い方が望ましいとも思っているよ。だけど封印を確認しなければならぬ『首』はあと二つあって、その他にもうやむやになっているものも色々ある。用心するに越した事はないよね。

いざという時のために使えるようにするには何が足りないだろう。命を奪うという怖さはどうしたら克服出来るのかな。

「私にもよく分からないのだが、自ら飛び出してきたあの枝にも、大きくなっていく樹にも、間違いないくエドワードの魔力が感じられた。ただただ封印が無事に終わる事だけを祈っているのだろうと思う。だからその根に薬を託したのだ。地中に伸びた根は願い通りに託した薬で『首』を眠らせた。浄化する事もなく、命を奪う事もなく、ただ封印のために眠らせていた」

「封印のために……」

そう、願ったのは確かに『封印と皆の無事』だけだ。でもその祈りと魔法の発動の条件が分からない。僕がそう思っているとお祖父様は再びゆっくりと口を開いた。

「エドワード、最初に加護が発動した時の事を覚えているか？」
「最初……鑑定の日のことでしょうか？」

僕は六歳の魔法鑑定の日について思い出していた。魔素で穢れた畑を浄化して、そこに何かの植物を芽吹かせた。

「確かその時も『祈った』と聞いた」

「あ、はい。そうですね。魔素で穢れてしまうとその後しばらくは何も植えられなくなると聞いて、『元気な畑に戻りますように』ってお祈りしました。そして魔力がゴソツとなくなりました」

「うむ。繰り返しになるが【緑の手】も【精霊王の祝福】も同じグランデイス様のご加護だ。はっきりと切り離せるものではないだろう。だが、今まで調べてきたように植物を芽吹かせる、増やす、成長させる、そして新しい植物を生み出すというような植物に特化したものが【緑の手】の力で、魔素で穢れた土地を浄化する、魔物の命を奪う、あるいは封印するなど、エドワードが真摯に祈った事を叶えようとする力が【精霊王の祝福】なのかもしれない」

「僕が祈った事……」

僕はお祖父様の言葉を繰り返し返した。確かに僕はあの畑の時も『元気な畑に戻りますように』とお祈りをしたし、兄様達と行った小さな森にフレ임・グレート・グリズリーが出た時はあまり覚えてはいないけれど、恐らくは魔熊の動きを止めたいと、そして兄様を傷つけられて「命を奪う」事を祈ったのだろう。

『首』の封印は、ハーヴィンに行かない選択をした自分が出る最大の事として「皆の無事と共に

封印が終わってほしい」と祈った。

だけど、もしも本当に、祈った事が叶う力があるとしたら、恐ろしい力だと思う。

植物を芽吹かせ育てる事も、生き物の命を奪う事も、そして大きな存在を押さえ込む事も出来るかもしれない力。ルシルの光の浄化とは異なる、一歩間違えれば悪にもなる力だ。

「……………祈り……………」

それでも僕は間違えないと思った。守るという事を一番にすれば、間違える事はない筈だ。それに僕はもう『悪役令息』ではないんだから。

「分かりました。今度はそれを試してみます。僕は無意識のうちにあの緑で覆われた魔熊の姿を思い浮かべていたのだと思います。でもそれはあくまでも結果であって、本質は大事な人を守るためのもの。そう考えればきっと『祈る』事が出来ると思います」

「うむ」

僕がそう言って笑うと、お祖父様もにっこりと笑って頷いてくれた。

少し後ろでジョシアもアシントンさんも、そして、ずっと一緒にいてくれるルーカスやマリーも笑っていて、ハリーはギョツとしがみついていた。

「エディ兄様、無理だけはなさらないでくださいね。僕はフレ임・グレート・グリズリーのお話は聞いた事がありますが、無理をしたら嫌です」

「ありがとう、ハリー。無理はしないよ。大丈夫」

そう、大丈夫。きっと大丈夫。フィンレーのおまじないみたいな言葉を口にして、僕は改めてあ

の力を自分のものにしたって思った。

お祖父様との話し合いにより、僕は『祈り』について試していく事になった。けれど一概に祈ると言ってもなかなか思うようにはいかない。ただお祈りするだけではやはり発動しないのだ。でもその事が分かって、僕はどこかでホッとしていた。

だって僕がこうしたいって思った事が全部叶ってしまったら怖いじゃない？ 何も考えられなくなっちゃうよ。だからお祈りした事が片っ端から叶う力じゃなくて良かった。

あとはお祈りが届く範囲についても検証を続けなきゃ。さすがにフィンレーと元ハーヴィンのように馬車で何日もかかる距離は、今回の枝みたいに何か繋ぐものが必要なんじゃないかってジョシアやアシュトンさんが言っていた。

ちなみにアシュトンさんはどんどん大きくなっていく木を見て本当にびっくりしたんだって。そして『首』の封印部屋に蓋をした形になっている噴水を壊していく根っこに、お祖父様が勢い良く薬をかけた時は、自棄を起こしてしまったのかと思ったって聞いて皆で笑ってしまった。

僕は今回ハーヴィンに行かない選択をしたけれど、いつか、僕が大きくなったという樹と、お祖父様達を作った神殿のような祈りの場を見に行けたらいいなって考えているよ。

そんな感じで週末が終わって、僕はルーカスと一緒にフィンレーでの鍛錬を復活させた。あの魔法をきちんと自分のものにするなら体力も必要だと、なんとなく思ったから。

学園から帰って、フィンレーに行って夕食の時間まで身体を動かして、タウンハウスに戻って

る。兄様が帰っていたら一緒に夕食を食べて、まだだったら先に学園の課題を片付ける。

兄様がそれに気付いて「頑張っているみたいだけど無理はしないでね」とハリーと同じような事を言っていた。でもこんな風に鍛えていたら、ジェイムズ君やクラウス君は無理でもステイブ君やエリック君くらいの体格になっちゃうかも……なんてちよつとだけ期待したんだよね。残念ながら身体つきはあまり変わらなくて、もちろん背が伸びる事もなかった。

「ルーカス、僕の背丈はもしかしても伸びないのかなあ」

鍛錬の後、そう尋ねるとルーカスは「成人した後も伸びる人もいますよ」と言葉を濁した。

学園に入ってからには体幹を鍛える運動くらいしかしなかったからなあ。それにどうも僕は筋肉がムキムキになるタイプではないみたい。まあ、前からそう思っていたけどね。でも……

「百七十、せめて百七十は超えたいなあ」

この王国の十五歳の平均身長は百七十三ティン（百七十三センチ）なんだ。僕は十六歳。だけどもうそこまでは望まないよ。だからせめてあと二ティン。二ティンあれば百七十になる。百六十台と百七十台、この差は結構大きいよね。

僕がそんな風に頑張っている頃、お城では父様や兄様達が少しずつ忙しくなり始めていた。

二の首〈死〉と三の首〈絶望〉の場所を特定するためだ。

『首』が封じられた時期は王国の始まりよりも古いと思われるので、今の王国の地理とは一概に比べる事が出来ない。前回はたまたまメイソン家の領地替え以前の場所と合致したけれど、二つ目も、三つ目もそれが当てはまるかどうかは分からないと、少しずつ帰りが遅くなり始めた兄様が教えて

くれた。

ハワード先生は代々大魔導師の称号を持つレイモンド家の領地と、王家と関わりのある場所を重点的に調べているようで、すでに何か所かは候補地が出ているけど、決め手がないらしい。

小説の中で起きていた『世界バランスの崩壊』が、全て一之首〈呪い〉がもたらしたものだとは考えにくいとも言っていた。だとすれば、他の『首』の封印も緩み始めているかもしれない。一之首〈呪い〉のように『封印』が解けかけてしまうと大変なので、なんとか早く見つかってほしいな。「今はどうなっているのかなあ」

しっかりと話を聞けるタイミングがなく、詳しい状況がなかなか入ってこないのは僕だけではない。ミツチエル君も「父上と兄上がまた忙しくなってきた」ってぼやいていたし、他の皆も気になる噂は今のところ聞いていないようだ。

いつもの癖で考えた内容をノートに書いていると、一階が少しだけ騒がしくなった気がした。どうやら兄様が帰ってきたらしい。時間を確かめると昨日よりは少し早い。その事にホッとして、僕は急いで部屋を出た。

「お帰りなさい、アル兄様」

「ああ、エディ。ただいま。起こしてしまつたかな」

メイドに外套を渡している兄様に、僕は「まだそんな時間じゃありませんよ」と答えた。

「兄様、お食事は？」

「ふふふ、エディにそう聞かれると去年の事を思い出すね。これから食べるよ。エディはもう食べ

たよね？」

「はい。でもちようどお茶を飲みたいなど思っていたので、よろしければ一緒に一緒にさせてください」

「一人で食べるのは淋しいから、そう言ってもらえると嬉しいな。じゃあ着替えてくるよ。エディも暖かい格好をしておいで」

こうして僕達はダイニングで少しだけ話をする事になった。

「父様から何かお聞きになっていますか？」

食事をしている兄様に質問をするのは申し訳ないなと思いつつ、僕はそつと口を開いた。もつとも兄様も僕が今の状況を気にしていると分かっているので、気軽に「今日聞いた話があるよ」と答えしてくれた。

「え、何か進展があつたのでしょうか」

「父上達の話し合いでは二之首〈死〉と三之首〈絶望〉の候補地がそれぞれ三か所ずつ挙がっているらしいんだけど、一之首の時のように次々と何か起きていくわけではないので判断が難しいみたいだね。それに『首』の件はまだ王国内に公表していないので、公に調べる事も出来ない」

「……なるほど」

「そしてもう一点」

兄様はそう言つてコーヒを口にした。僕はコーヒがまだ苦手なんだよね。そんな事を考えながら見ていると兄様がクスリと笑った。

「クリームを入れたラテというものもあるよ？ 今度飲んでみるかい？」

「い、いえ。僕は紅茶の方がいいです」

「そう。じゃあ今度また一緒に紅茶の店に行こう。さて、話が横道にそれてしまったね。もう一点挙げられているのは以前にも話題に上がった事があるけれど、それぞれの『首』の禍は違うのだろうかという疑問だ」

「禍が違……」

僕の中で何かがひっかかった。

『首』には不思議な名前がついている。一の首〈呪い〉が起こした禍では魔素が次々に変化をして人を襲ったり取り込んだりして、魔人を生み出し、それがまた新たに犠牲者を増やしていた。その中で『呪い』という声も聞かれていた。だからつけられた名前のような禍があるのではないかという意見も出ていたんだ」

「そういえば友人達と話した時にもそんな話題が出た事があります。なぜ『首』に名前がついているのか。もしその『首』についている名前の禍が封じられていたらどうなんだろうって。でも、その後に名前と同じ禍が起きるなら西の国と同じような事は起きないだろうって話になって、元が同じなんだから始まりも同じじゃないかっていう意見もあってそのままになっていました。けどそうですね。あのアンデッド騒ぎや魔人騒ぎの時に、『呪い』という言葉を確認に聞いた気がします。そう考えると〈死〉や〈絶望〉に関する禍が起きるかもしれないという事でしょうか」

「うん。それはあまり起きてほしくないな」

「……そうですね。西の国にはこれ以上の文献は残っていないのでしょうか」

「今のところはお手上げかな。それにルフエリットに封印された『首』の詳細が西の国にある確率は低いだろう。でもね、父上達は出来る限り早く場所を特定して、封印の状態を確認し、ハーヴィンのようにきちんと封じたいと思っているよ。だけど、候補地を人海戦術で片っ端から調べて万が一にでも封印を解いてしまうような事があるっては取り返しがつかないと考えている。一の首を見ているから慎重にならざるを得ないんだ」

「はい」

それは当たり前だ。起きかけている『首』がどれほどの魔物を喚び出すのか父様達は知っている。だからこそ封印されている『首』をわざわざ起こしてしまうなんて絶対に出来ない。しかもどんな禍が起こるかも分からないもの。

「だけどの首を封印した事で、『首』について調べている者もいるらしい。それも父上達を困らせている。粛清によって管轄領になった土地が多いから、うまくいけば領地持ちになれる、または爵位が上がる可能性があると思う者もいるそうだ。そのあたりを殿下とニールデン公爵が秘密裏に探っているよ。でもこれは極秘情報だ」

兄様はそう言って困ったような笑みを浮かべ、少し冷めてしまったコーヒーを飲み干した。そして僕は今聞いたばかりの情報を信じられない気持ちで受け止めた。ああ、そんな風に思う人もいるんだな。父様や兄様達があんなに大変な思いをして封じた一の首〈呪い〉を、領地や出世と天秤にかけるのか。

「エディ、つまらない話を聞かせてしまったね」

「いえ、教えてくださってありがとうございます。情報に関しては父様や兄様からのお話がない限りは胸の中にとどめます。そんな人達がいるんだなって、勉強になりました」

どう言っているのか分からずにそう答えると、兄様は少しだけ驚いた顔をして、笑った。

「兄様？」

「ああ、ごめんよ。エディが真剣に怒っていて、でも勉強になったと言っから。……そうだね。色々な人間がいる。私としてはどうしてそんな考えを持つ者に魔素が巣くわなかったのかと思っただけ。エディの勉強になったのなら良かった。父上はね、手柄などいらなから手を引いてもいいなら引かせてくれて言っていた」

「父様……………」

「そんな情けなそうな顔をしないで。本当に手を引いてしまうような方ではないよ。大丈夫。さあ、おしゃべりはおしまいだ。とにかく状況はほとんど変わっていない。また何かあれば話をするよ。」

もちろんエディ達の助けが欲しい時にもね」

「はい」

兄様がゆっくりと立ち上がった、僕も椅子から立ち上がった。

「お疲れのところお時間をとっていただき、ありがとうございます」

「エディとの話ならいくらでも時間をとるよ。今度はもう少し楽しい話が出たいね。そうそう、忙しくならないうちにお茶を買いにいこう。この前のお茶も美味しかった。エディの好きなフレーバーティーの新作があるといいね。春になるから新作が出るかもしれない」

「はい。よろしくお願いします」

少し苦い話になってしまったけれど、兄様と買物物の約束が出来たのは良かった。僕達は階段を上がってそれぞれの部屋に向かう。

「では、おやすみなさいませ。アル兄様」

兄様の部屋より僕の部屋の方が手前だから、僕はそう言ってドアの前でお辞儀をした。すると兄様は無言で僕の身体をそっと引き寄せた

「！ に、兄様？」

「うん。少しだけ私へのご褒美に」

「……ご褒美ですか？」

どうしてこれがご褒美になるのかなって思いつつ、僕はドキドキと騒ぎ出した鼓動が兄様に伝わってしまわないかとそればかり気にしていた。緩く抱き締めている腕から伝わってくる温もり。どうしよう。どうしたらいい？ 僕もギュッとした方がいい？

そんな事をグルグル考えていたら、兄様がゆっくりと離れた。

「よし、明日も頑張れそう。エディありがとう。おやすみ」

「……お、おやすみなさい。えっと、えっと……兄様のお疲れが取れますように！」

そう言って離れてしまった温もりをギュッと抱き締めて、僕は急いで部屋の中に入った。

(僕は何をしているんだろう……)

兄様の顔は見られなかったけど、呆れているかもしれない。でも……

「……………これは僕へのご褒美ほうびだったのかもしれない」
父様も、兄様も頑張つていらつしやる。まだまだ分からない事が多いけど、それでも僕が出来る事があるのなら頑張ろう。

翌朝、兄様は出かける時に「お陰様で疲れがとれたよ」って笑って、僕はどうしているのかわからないまま「良かったです」って答えた。顔が熱かった。

そして、それから少しして、西の国・シエルバーネから思いがけない知らせが届いた。



一の月の半ばなつかを過ぎた頃、西の国から突然書簡が送られてきた。そしてその数日後、王城に西の国の使者がやってきたという噂が学園の中にまで広がった。

「エディ、西の国の使者の話。詳しく聞いた？」

尋ねてきたのはミッチェル君だ。

「うん。書簡が送られてきて、使者が来たらしいっていう噂だけ」

「アルフレッド様からは？」

「このところまた帰りが遅くなって会えていないんだ」

それを聞くとミッチェル君は「ふっふっふ」って笑って「僕は昨日、夜中に帰ってきた父上に突撃した。こういうのは父上の方が甘いんだよ」と言う。その後ろでステイブ君がサツと遮音の魔

道具を出していて、ちよつと噴き出しそうになってしまった。

ともあれ、ミッチェル君の夜中の突撃によって分かったのは、噂が本当だって事だった。

いきなり書簡が送られてきて、ぜひともお話をしたい件があると書かれていたのだとか。

王城の中でも色々と揉めたんだけど、そうこうしているうちに使者が来てしまい、結局なし崩し的に受け入れる事になったらしい。それでいいのかなって思ったけど、外交の正常化についての話と、それに対する『お土産話』だと言われたんだって。

さすがに使者はそうは言わなかったと思うけどね。きつとミッチェル君のお父様がミッチェル君に分かりやすいように砕いて伝えたんだろう。それにしても『お土産話』か、気になるな。

先王が国境を改めて定め、お互いの領土を脅おびやかささないという不可侵条約を結んで、もう百年くらい経つのかな。

先々王がおかしくなったのが百二十年くらい前だって言っていたものね。今はお互いの国の鑑札を持っていて商人だけが行き来出来る状態になっていて、国同士の直接的なやりとりはないけど、完全に断絶しているわけではない。

もともと戦争があったっていう認識は、西の国にしかないみたいだった。それが分かった時、父様がダリウス叔父様にお手紙を出していたから、もしかしたらその件が関係しているのかもしれないなって話を聞きながら思ったよ。

「実際にどんな話だったのかはまた聞いてみるよ。『お土産話』の内容が気になるよね。とりあえずこのタイミングでどうして正常化しようと考えたのかは分からないけど、西の国との行き来が始

まったら『首』の事ももっと詳しく分かるかもしれないね」

「ミツチエル、でもそれはあまり広めては駄目だよ」

「うん。分かっているよ、トム。とりあえず皆にだけ最新情報を伝えたかったんだ」

「それはありがたいけど、レイモンド伯がお戻りになった時間って結構遅かったんじゃない？」

「まあね、ちよつとこの後の講義が心配だけど、好きな科目だから大丈夫かな」

そう言つて機嫌良く笑うミツチエル君の目の下にはうつすらとくまがあつて、皆は温い笑みを浮かべて席に着いた。

それにしても国交の正常化かあ。ミツチエル君の言う通り、どうしてこのタイミングなのかな。だってルフェリットが『厄災』の『首』を探して封印している事はダリウス叔父様を通じて西の国には伝わっている筈だ。当然封印を確認すべき『首』があつたら二つある事も分かっていると思う。

それに西の国の人は魔法を使えない人が多いわけだし、ほとんどの人が魔法を使えるルフェリットとの交流つてどうなんだろう。

学園のあちこちでこの話題が出ていたけれど、もちろん答えが見つかるわけはなかった。僕はタウンハウスに帰ると自分で課した通りフィンレーでルーカスと一緒に鍛錬して、温室を確認。そして王都に戻つて今日の課題をと思つていたのに、結局西の国の事を考え始めてしまった。

皆が疑問に感じていた通り、西の国がわざわざ国交を正常化したい理由はなんだろう。このタイミングというのは何か意味があるんだろうか。

一の首が封印されてルフェリット国内が落ち着いているからなのかな。

だけど西の国の人達は魔法が使えない人が多いし、ルフェリットの人達が自由に行き来出来るようになったら怖くないのかな。そのあたりの対策をどう考えているんだろう。

「……でも以前の叔父様の話だと、魔法を使える人は大事にされているんだよね」

確か鑑定の後、魔力保有者が奴隷みたいにならないようにきちんと保護しているって聞いた気がする。もしも本当に正式な交流が始まったらどうなるんだろう。

そんな事を考えていたら、なぜか兄様の笑い声が聞こえた。

「え？」

「ふふふ。声をかけたんだけど、なんだか一生懸命考えているみたいだったから」

「す、すみません！ えっと、おかえりなさい。アル兄様」

僕は慌ててそう言った。だって、ものすごく帰りが早い。

「うん。ただいまエディ。その感じだと西の国の使者の事を考えていたのかな」

「あ、はい」

さすが兄様。ああ、でもまた声に出していたのかもしれないな。嗜みたしな。気をつけないとね。

「おかしな噂が広がる前に少し話をしようか。多分叔父上からも連絡が入ると……もう入っているかもしれないな」

「え？」

「でも父上はしばらく話が出来る状況ではないと思う」

「あの……国交が正常化するという事だけではないのですか？」

僕がそう尋ねると兄様は少しだけ考えるような顔をして、「私の部屋に行こう」と言った。

「父上から改めて話があると思うけど、現在の状況を説明するね。まず先週いきなり西の国から書簡が届いたんだ。国交の正常化に向けた話し合いがしたいという内容だった。王城内はいきなりどうした事かと色めき立った。国王には例の国境攻めの詳細を伝えてあったので、百年以上も前の行き違いの件という事で使者を受け入れる運びになった」

「あ、あの、書簡だけ送られてきて使者がいきなり来てしまったわけではないのですか？」

「学園ではそんな噂になっっているんだね。まあ確かに書簡が届いてから使者がやってくるまでの時間が短かったからね。でもさすがにそれはないかな。こちらからは分かりましたという返事を出している。確かにやってくるのが早かったが一応想定内かな。国王陛下には国境の資料やフィンレー家を出た当主の弟が、かの国で公爵家と縁を結んでいる話は伝えてあったけど、公にはなっていないなかつたので、トルマン侯爵家、レイモンド伯爵家、それにマクロード伯爵家も『首』の事を出さずに国境警備について話を合わせてくれたし、どうせ分かってしまうからと、父上も家を出た弟が西の国で高位の貴族と縁を得た事を発表した」

「そうなんだ。ダリウス叔父様についても公表したのか。でもその方がいいよね。これから国交が正常化するなら、分かっていた方がいい。」

「これでフィンレー当主の弟が里帰りのついでに話した西の国から仕掛けられた戦の件を、国王陛下に伝えて、一応その国境にあたる領にも確認。ルフエリットとしては戦を仕掛けられた認識はな

下で伝えて、一応その国境にあたる領にも確認。ルフエリットとしては戦を仕掛けられた認識はな
いといる事が分かつたので使者を受け入れたって形になつただけど、それだけに収まらなくなつちやつたんだ」

「え？」

「今ね、宰相府と外相と、使者の謁見に出席していた高位の貴族達は大変な事になつている」

兄様はそう言つて苦笑した。

「それは、どういう……」

僕がおずおずと口を開くと、兄様は「使者が『首』についての情報を持つてきてしまつたんだよ」と困つた顔で説明してくれた。

「え……ええええええ!？」

僕は思わず大きな声を上げてしまった。

「それって、ええつと、どんな情報だったのですか？」

「うん。その昔、西の国が荒れ、他国に攻め入るような事が起きたのは、先々王が〈狂気〉という名の『首』の封印を解いたからだと思われる」と

「〈狂気〉ですか」

「そう。それが分かつた上で今はきちんと封じられているので、他国を攻めるような事はないと約束出来る。そして伝説によると『厄災』という名の化け物の『首』は五つで、そのうちの〈破壊〉と〈狂気〉が西の国に封じられており、『厄災』自身の体はどこに封じられているのかは分からないけど、他の『首』は恐らくルフエリット内にあると思われるので注意されたし、とね。それ

が、西の国の国交を正常化させるための『手土産』だったんだよ」

それは大変な『お土産話』というか、『手土産』になってしまったなと、僕でさえ思った。

「使者には改めて、正常化に向けた話し合いの場を設けるとして、書状を渡して早々にお帰りいただいたんだけどね。少し物足りなさそうな顔つきだったが、過去の事は水に流し、新たな信頼関係を築いていく事を前向きに検討するとしたようだ。それで一旦は引いてくれた。だけど大変なのはその後だ。王城内では情報を知っている者と知らずにいた者との間で、諍いかりいが起きかけた。とりあえず、全ての貴族を集めるわけにもいかず、高位の者だけで緊急の会議を開いている。こういう時は第二王子の側近は参加出来ないからね。城に詰めていても仕方ないから帰れと言われたよ。なかなか厄介な事になった。王室は一部の貴族を蠱ひい扇きするのかと怒る人達もいたしね。これに、今までのもたらぬ話し合いを考えれば少数の者で話を詰めていた事もいたしかたないのではと反論した者がいて、落ち着くまでにはしばらく時間がかかるんじゃないかな」

やれやれと言わんばかりの顔の兄様に、僕は何をどう言っているのか分からなくなってしまった。だって、父様達はあんなに大変な思いをして封印をしたのに、それがこんな風に責められるなんてあんまりだ。皆が知ってパニックを起こしたらもつとひどい事になっていたかもしれないのに。

「どうしてそんな風に考えるのでしょうか」

「エディ？」

「皆のために一生懸命考えて、動いて、本当に忙しくて、それなのに蠱ひい扇きとか、ひどいです！」

「うん、そうだね」

兄様は涙目になってしまった僕の背中をトントンとしてくれた。

「でも大丈夫だよ、エディ。いずれは噴き出す不満だったと父上達は思っていた筈だ。ここで膿うみを出し切ってしまうば西の国との国交正常化も出来るし、情報の収集もしやすくなる。面倒なのは以前にも話したような、功を焦あせつて他の『首』を我先に探そうとする輩やからだ。そこさえ気を付ければ意外と事は早く済むかもしれない。それに一の首へい〈呪い〉はすでに封じられていて、その結果、目に見えて禍わざが減へっているから、こちらを支持する者も多いんだよ。そのあたりは父上達に任せておけばいい。それくらいでどうにかなるような人達ではないからね」

「でも、言葉は人を傷つける時があります。僕は、父様達に傷ついてほしくないです」

「じゃあ、それはエディや母様達が頑張がんばって癒なごしてほしいな」

落ち着いた口調でそう言われて、僕はまだうつすらと涙が滲にじんだ瞳のまま兄様を見上げた。

「……………兄様も忙しくなりますか？」

ただでさえ『首』の封印場所を特定するため二人とも忙しくしていたのに。

「うん。この争いには直接的には関わらないつもりだよ。私に面倒な事を言ってくるような者もそんなにはいないだろうね。フィンレーを敵に回したくないと思う人間の方が多い。父上やお祖父様達が積み重ねてきたものがあるからね。でもしも、何かを言われたら別に私達は悪い事をしていないわけではないから堂々としていればいいよ。それだけでいい。もしもエディがその事で何かを言われて苦しくなるような事があつたら話をしてほしい。約束だよ？」

「……………はい、兄様」

「うん。じゃあ、食事にしよう。大丈夫。父上も、お祖父様も、そして叔父上も色々動いている。そして私達の友人の当主達もね。皆一癖も二癖もある人ばかりだから」

「そう言われて、僕はコクリと頷いた。堂々としていればいい。そうだよ。だって悪い事なんて一つもしていないんだもの。」

「それにしても、西の国は先々王が『首』の封印を解いた事をちゃんと突き止めたんですね。しかもどの『首』なのかも」

「そうだね。そしてきつともう一つの〈破滅〉の『首』の場所も把握しているのだと思っただよ」

「はい。ルフエリットも早く、他の『首』の場所も特定出来ると思いますね」

「そうだね」

「そして僕達は部屋の遮音を解いて、ダイニングに向かった。」

その日、父様からの連絡はなかった。



兄様の言った通り王城はものすごく揉めていたらしく、父様はタウンハウスにも、フィンレーにも全然姿を見せなくなっていた。

ダリウス叔父様から何か知らせが来ているみたいだったけれど、その内容も分からず、僕はどうする事も出来ずにいた。週末にお祖父様に相談してみようかと思っていたら、お祖父様も王城に行

かれているそうだった。

「なんだか皆がものすごく忙しくなっちゃった感じだよ」

温室の手入れをしながら言うのと、隣で同じように手入れをしていたハリーが頷いた。

「そうですね。父様も全然戻られませんが、さすがに母様が心配しています」

「そう。じゃあ、あとで母様をお茶に誘ってみようかな」

「エディ兄様がそうしてくださると母様も喜ぶと思います」

ハリーはにつこりと笑ってまた頷いた。

「ところで最近はお妖精達の方はどう？ 何か言っていない？」

「そうですね。特に変わらなかなあ。毎回来ては果物の味見をしていく子もいるし、たまに来て蜂蜜をねだる子もいます。ああ、あとは兄様が見せた水の鳥が気に入ったみたいで、やって見せてほしいってせがまれた事もあります。兄様ほど上手には飛ばせなかったけれど、喜んでいましたよ」

「あれは僕が小さい頃にジョシユアが見せてくれたんだよ。僕は魔法で人を傷つけてしまう事を怖がっていたから、魔法は楽しいって教えてくれたんだ。僕にも風魔法を纏わせて空を飛ばしてくれ。水の鳥との空の散歩は楽しかったなあ」

「わあ、それは楽しそうです。僕もやってみたかった」

僕達はそんな話をしながら温室の手入れを終えて、屋敷に戻った。

稽古を終えたウィルも帰ってきて、僕達は母様を交えてお茶を飲んだ。こんな事なら王都で何か流行っているお菓子を持ってくれば良かったなって思っていたら、シェフが用意をしていたよ。な

んでも一の月の半ばを過ぎた頃から二の月の『告白の日』に向けて、色々なチョココレートの新製品が出始めるんだって。もう何年も王都にいるのにほとんど気にしていなかったな。

『告白の日』というのも昔、兄様にチョココレートをいただいて、お返しをしたけど……毎年の行事にはならなかったんだよね。だって僕にとってはその後にある兄様の誕生日の方が重要だったから。ちなみに今年は濃厚なチョココレートの中にクリームとかナッツのペーストを入れたものが多く売り出されているらしい。シェフもいくつか試作をしているからお試しにつて。やっぱりうちのシェフってすごい。

「父様にも食べさせてあげたいなあ」

僕がそう言うのと母様がにっこり笑った。

「そうねえ。でもさすがに二の月になる頃には落ち着くでしょう。他の『首』を探さないといけませんからね」

「そうですね……」

ただそうすると、また今とは違った意味で忙しくなっちゃうんだろうな。身体を壊さないか心配だよ。

「心配しなくても大丈夫ですよ。勢い良く発言している者達も、言えば言うほど自分達の首を絞めているとそろそろ気付くでしょう。中枢近くにいる者は果たすべき役割も大きくなってしまふものなのです。それを妬む者達にはその重みも理解出来ない。理解出来ない者といつまでも話をしていても仕方ありません。ダリウス様からも連絡が来ているようですし、そちらの方へ重点を置かな

いと、かの国に後れを取ってしまいます」

「その事もお話を聞かせていただければと思っはいるのですが。でもまずはこの争い事を早く鎮める方が大事ですよね」

「そう。だけども、エディ。こんな事をやっている場合ではないと早く気付けないような者は、また切り捨てられていくのですよ。魔素の件とは違った節だと思えば良いのです。ところでアルは元気がしら？ タウンハウスの方には戻っているようだけど。まさかこのゴタゴタに巻き込まれているの？」

母様の言葉に僕は「大丈夫です」と答えた。

「兄様はそれほど遅くならずに戻られています。話し合いが上の人達に限られていて、兄様達は参加出来ないそうです。シルヴァン様もこれに関しては無理に意見を押し通す事もないようです」

「そう。それなら良かった。二人でバタバタされるとやはり落ち着かなくなりそうですからね。エディも色々考えすぎではいけませんよ」

「はい、母様」

僕がそう返事をするのと母様は嬉しそうに笑って頷いた。母様が心配されているって言うていたけど、なんだか僕の方が心配されてしまったみたい。でもこうして話をするだけでも落ち着くし、試作のチョココレートも美味しかった。お話し出来て良かったな。

夜になって兄様が王城から戻ってきた。

「お帰りなさいませ。兄様」

「ああ、エディ。ただいま。ちよつといいかな？」

リビングで出迎えた途端、声をかけられ、「はい」と返事をしてそのまま応接室に向かう。

部屋に入るなり遮音の魔法をかけて、兄様は見覚えのある魔道具をテーブルの上に置いた。

「それは……」

「父上から預かった。時間が取れないから見せてやってほしいって」

その間も手を止めず、魔石を入れて魔力を流すと小さな筒の上にダリウス叔父様の姿が現れた。

『多分もう書簡が届いていると思う。申し訳ない。私の立場ではそれを止める事が出来なかつた』

挨拶もなく、叔父様はいきなりそう話し始めた。どうやら書簡が届いた頃に送られてきたお手紙のようだ。

『公爵家には英雄譚の本や『首』の事、先々王や先王の事などを調べるためにかなり協力してもらつたので、件の戦と国の不可侵条約についての話をしないわけにはいかなかった。しかしまさかそれを国交正常化の切り札にされるとは思ってもいなかった。凡庸な国王だと思っていたが、それなりに食えない御仁であつたようだ』

叔父様はそこで一旦話を切り、再び話し始める。

『書簡で知らせた内容を受理すれば、ほどなく使者がルフエリットに行く。王は先王が書き残していた情報を正常化への『手土産』として携えていく筈だ。私を知る範囲では西の国の『首』の事だ。お伽話と思われていた五つ首の英雄譚にあつた禍をもたらす『首』の封印を解いた先々王の常軌

を逸した行動。そして、西の国には二つの『首』が封じられていて、どちらもきちんと封じられているので国が開かれたとしても禍がそちらへ及ぶ危険はないという話を持っていくだろう。その他は分からない』

「その他……？」

僕が呟くと兄様がコクリと頷いた。叔父様の言葉はまだ続く。

『『首』に関する情報は全て封じられたか燃やされたと聞いていたが、王家が先の世で再び封印が解かれた時のためにしまい込んでいたんだと思う。それはいい。いいんだが、他国との政治的なやりとりの切り札に使うというのはどうなのかと言ったものの、聞き入れられなかつた。この件もあつて、私はしばらくそちらへは行けそうにない。行けば余計な肩書をつけられそうだし、その方がフィンレーにとつて扱いにくくなると思つている。とにかく何か隠し玉を持っていると見て気を付けてほしい。父上もおられるし、滅多な真似は出来ないとと思うが、そちらにも馬鹿な事を考える人間はあるだろうからね。それから『首』の一つをルフエリットが封じたらしいという話はこちらにも届いている。正常化していなくてもこういう情報はちゃんと把握出来るんだなと感心したよ。しばらくは連絡も出来なくなるかもしれないが、私は王家にとつても公爵家にとつても切り札みたいだから心配はしないほしい。国の行き来がたやすくなるのは嬉しいが、それまでの経過がもどかしいね。では』

小さな筒の上からダリウス叔父様の姿が消えた。思わず漏れ落ちたため息。それを聞きながら魔石を外した魔道具を兄様がバッグの中に戻した。

「ありがとうございます。隠し玉、というのはルフエリットには三つの『首』が封じられているので注意されたという事だったのですね?」

僕がそう言うのと兄様はにっこりと笑った。

「さすが賢者の教え子だ。ルフエリット国内の場所の特定まではされていないだろうが、〈狂気〉の『首』は先王が封じ、もう一つの『首』〈破滅〉も封印し直されている。だから、国交が正常化したらどのように封じ、どのように探し出したのか、教えてやれるかもしれない。『首』による禍を経験している西の国にとって、有利に事が進められると思つての『手土産』なのかもしれないし、今のルフエリット国内の状況を分析しているのかもしれない。そこは駆け引きだね」

「……………なんだか少し怖い気がしますね」

「ああ、でも国交を正常化するにあたって、あちらもこちらの内情を少しでも把握したいんだろう。それに以前、叔父上から聞いたように、魔法を使える者が少ないから考えなければならぬ事もある」

「そうですね…………でも兄様、西の国はどうしてそんなに国を開きたいのでしょうか?」

そこがよく分からないんだ。

先々王の凶行から国を救い、〈狂気〉を封じた先王。以前聞いた話では自身も全身に瘡が浮かび、その痛みで耐えながらも『首』を封じ、砂漠化を緩やかにした。これは僕の仮説だけど、他国との国交を断絶したも同然の形をとったのも、もしかしたら他国を守るためだったんじゃないかと思うんだ。だって『首』にとっては他国との境なんてなかったような時代でしょう? その証拠にルフエリットにも『首』がある、しかも三つも。だけど実際にルフエリットで砂漠化が起きたのは一の首

〈呪い〉の騒ぎの後だ。

もつとも、魔素が砂に変わるタイミングもよく分からないんだけど。

「外貨を得たいという理由もあるのだろうと思うよ。今は鑑札を持つ商人達から上がってくるものくらいだろう。でも先王の戦い以来、西の国は復活してきて、枯れた土地は元には戻らないけれど、それでも人は増えているんじゃないかな。とすれば外貨を得て、国を豊かにしなければならぬ。それに商人は鑑札があれば行き来する事が出来るというのも、身分差や権力バランスの不均衡を生むだろうね」

ああ、そうだ。確かに一部の人に有利に働く構造つていうのは不平不満が出てくるだろうし、もちろん経済的な格差も生まれる。

「魔法が使えても装飾品やインテリアといった魔道具はルフエリットで売れる事が分かっている。それを商機と思う者もいるだろう。いつまでもシエルバーネの中だけで生きていくには限界がある。特に魔素から変わったと言われる何も生まれず、育たない死の砂漠を抱えるシエルバーネにとって、国を開く事が未来へと繋がると思える者が出てもおかしくはないだろう。しかも原因となった戦いが相手国にとって戦と認識されていなかったのなら、土産を持って正式なお付き合いをと言つてくるのは想定内かな」

「そうですね。この混乱を見てシエルバーネが何を思うか。シエルバーネにとっての切り札はまだ出てきそうですね」

僕がそう言うと、兄様に頭をポンポンと軽く叩かれた。